

自己物語の多声性

－ 3つの事例によるナラティブ分析－

伊 藤 智 樹

1. 本論文の目的と問題意識

本論文は、伊藤（2005）の続篇であり、自己物語の多声性を具体的なデータの中から読み取ることを目的とする。

まず、多声性の「声」について、説明を加えておこう。質的研究における「声」の概念は、インフォーマントの「声」をいかに聞かせるか、という関心のもとに広まった。「私」の存在を巧みに消した研究者＝書き手によって唯一の現実を語る伝統的な記述方法は批判にさらされ、「インフォーマントの正確な言葉（そして時折、パラ言語的な手がかり、言いまちがい、沈黙、停止、開始、言い直し）を聞かせる」ことに繊細な関心が寄せられるようになってきた（Lincoln & Guba 2000=2006: 162）。こうした流れをふまえたうえで、本論文では、自己物語の読み方を複数化させるデータ中の要素を「声」と呼ぶ。

近年の研究で、私は、セルフヘルプ・グループを「回復の物語（the restitution narrative）」によらずして生きるための場としてとらえている（伊藤 2005; 近刊）。「回復の物語（the restitution narrative）」とは、A. フランクによる語で、「昨日私は健康であった。今日私は病気である。しかし明日には再び健康になるであろう」という基本的な筋書きを有する物語である（Frank 1995=2002: 114）¹⁾。フランクによれば、近代社会において、「回復の物語（the restitution narrative）」は、臨床の現場から市販薬のコマーシャルに至るまで溢れており、病はかく語られるべきだという雰囲気を生み出している。ところが、セルフヘルプ・グループの物語に耳を傾けていると、「回復の物語（the restitution narrative）」との間に「物語のずれ（narrative slippage）」（Holstein & Gubrium 2000: 119-10）を読み取ることができる。このことから、セルフヘルプ・グループは、「回復の物語（the restitution narrative）」によらずして生きるための自己物語を編む場になっていることがわかる。

しかし、その一方で、「回復の物語（the restitution narrative）」との距離をとる難しさもある。伊藤（2005）において、私は、「回復の物語（the restitution narrative）」とは異なるセルフヘルプ・グループの物語に自己物語を適合させてゆくひとりの参加者（Aさん）に着目した。Aさんは、新規参加当初は「回復の物語（the restitution narrative）」に親和的な自己物語を語っていたが、少なくとも約1年半たった頃から、セルフヘルプ・グループで語られる物語とプロットの一一致する自己物語を語るようになる。しかし、そうした物語の「評価」²⁾の中に、ためらい

の声が姿を現す。これは、注意しなければ気づかれないほどの言いよどみや沈黙という形をとっており、語り手が「回復の物語 (the restitution narrative)」との決別を見事に語りきれない痕跡として解釈できる。セルフヘルプ・グループに定着して自己変容を成功裏に遂げているように見えるAさんにおいてさえ、こうした声を観察できることは、「回復の物語 (the restitution narrative)」との距離をとる難しさを想像させるに十分である。つまり、セルフヘルプ・グループで語られる病いの自己物語は、確かに「回復の物語 (the restitution narrative)」との距離を示すけれども、それと同時に、そうした距離をとることの困難性を、その多声性において示すと考えられる。

本論文でデモンストレートしたいのは、そうした自己物語の多声性を示すいくつかのヴァリエーションである。

2. プロットを揺さぶる声：Uさんの事例

Uさんは、2000年夏に、死別体験者によるセルフヘルプ・グループの集会で私と出会った当時60歳の男性である。彼はその3ヶ月前に妻を自死で亡くしており、居ても立ってもいられない心境で集会を探してきたのだ、と語っていた。帰りの電車の中でたまたま私と一緒に became とき、彼の話は別れ際になっても止まらず、私は、インタビューへの協力という形で続きを伺うのはどうでしょうか、と提案した。インタビューは、2000年7月に2回（1回目が約155分間、2回目は約100分間）と、同年10月に1回（約115分間）、いずれも彼の自宅で行われた。

Uさんが1回目のインタビューの最初に語った物語は、自責の物語である（伊藤 近刊）。これは、死別の原因となる出来事に主人公が関与し責任を持つ物語を指す。それによれば、妻の死の数ヶ月前、Uさんは不安定な彼女のことで精神科を受診した（彼女自身は精神科をひどく嫌っていた）。精神科医から薬が処方されたが、Uさんはそれを内緒で茶の中に入れて妻に出していた。彼の自責の物語は、このことを重要視して「薬を飲ませたせいで、妻は心身ともに疲れてしまい、自死を遂げた」というプロットになっていた。

Uさんの自己物語は、混沌としてはいたが、自責のプロットを持つ点においては一貫しているように見えた。しかし、1回目のインタビューの後半で、この一貫性を揺さぶる声が現れる。この部分は、ひとりの知人の死に関する物語の評価にあたる。主人公である知人は、10年ほど前に仕事を辞めて他の会社に移ったが、現場で仕事にけがをしてしまい、半年ほど通院した後で自ら命を絶った。彼は、家では「大威張り」であり、家族にも大事にされていた。ところが、いつものようにしていたある日、妻が仕事に出かけている間に突然の死を遂げたのである。この後で、語り手は、次のようなナレーションを付している。（データは、便宜的に改行して、行番号を付した。「・」は2、3秒程度の沈黙を、「・・・」はそれよりも長い沈黙を、「*」

と下線は引用者による補足を示す。以下の引用でも同じ表記法を用いる。）

1. あれみるとやっぱり亡くなる人は突然おわるみたいですけど、
2. それとやはり、怪我の治療してるなかで、
3. あのう、気弱くなっちゃったんでしょうね。
4. あのう、会社に行くとまた怪我しちゃって、
5. 会社の人になんか気休めとかなんか言われたりしてね。
6. それが気になったりして、
7. そういうことなんじゃないかっていうんですけども、
8. あれみると防げないのかなあっていうふうに思いましたけど、
9. 亡くなる人・
10. だ・これ（*妻）の場合は、どうしてもあれだね、薬あてがっちゃったからだね、隠れて。
11. あのう・・・だれにもいえないこの気持ちはね。
12. こっち（*妻）は医者行くのが嫌いで薬が嫌いなのに、
13. こっち（*自分）は一生懸命薬やっちゃってるの。
14. 大人しーくなっちゃって、
15. 大人しくなっちゃう、
16. 体の調子が悪くなっちゃうんだから・・・
17. こっちが早く終わらせたようなもんだけど。

死別が「突然」（1行目）であるという物語の評価は、8行目の「防げないのかなあ」という言葉によって、より鮮明な形を与えられているように見える。この評価は、それまで一貫していた自責のプロットとは緊張関係にある。というのも、その知人の死を「防げない」出来事として語ることは、妻の死もまた「防げない」ものとして語り直すチャンスをもたらすが、それは「薬を飲ませたせいで、妻は心身ともに疲れてしまい、自死を遂げた」というプロットと相容れないからである。したがって、この声は、一貫する自己物語に対して揺さぶりをかけ、オルタナティブな物語のプロットを示す声だといえる。

しかし、この声は長続きしない。その後「亡くなる人」だけで発話は途切れ、短い沈黙になる（9行目）。そして、10行目では「だ（*から）」の後に再び短い沈黙があり、その後「薬あてがっちゃったからだね」となっている。これは、「薬を飲ませたせいで、妻は心身ともに疲れてしまい、自死を遂げた」というプロットに自己物語が回帰したことを意味している。その後の17行目まで、自責の評価は一貫して続く。

しかし、3回目のインタビューで、再びこのプロットを揺さぶる声が姿を現す。それは、や

はり他人の死を語る物語の中の評価にあたる部分においてである。その物語では、精神的に不安定な青年とその親が一緒に出かける。青年は親に、少し一人で行動したいので待っているように言い、親は少し離れたところに座っていた。青年は、特に変わった様子もなく歩いていたが、通りかかったトラックに突然飛び込んで亡くなった。この物語に続けて、Uさんは次のように語っている。

1. すると、そういう話を聞くと、
2. やっぱり自分から亡くなる人は・防ぐことができないってというのは、
3. この薬をもらった先生の言った言葉の中にあっただけ・・・
4. 防ぐことはできない、いくら気を使っても防ぐことはできないって言ったの、
5. それは、この薬の先生。
6. あ、それはそうかなって、その時は思ったよね。
7. 自分から亡くなる人は、いくら気を遣っても周りの者が防ぐことはできないって、
8. えーいうの・
9. で、他の精神科の先生も、
10. その、亡くなる時は、何の気なしにフラフラッと入ってっちゃったりするから、
11. 急に思いつくから、
12. あおう、防ぐことはできないって。
13. そういう人の話を聞きながら、
14. ああ防ぐことはできないんだって思えば、
15. 自分も、ああ防ぐことはできなかつたんだって思えば・・・
16. 励みになるのかねえ。
17. 諦めになるのか・・・
18. そういう話で・・・

まず、2行目に「防ぐことはできない」という声が現れる。3行目と5行目の「先生」は、Uさんに薬を処方した精神科医である。Uさんは投薬に納得はしていないと語っていたが、この部分では、「先生」は「防ぐことはできない」というプロットを権威づける機能を果たしている。9行目の「他の精神科の先生」も同じ機能を果たしている。ここでの特徴は、前の例でプロットを揺さぶっていた声がすぐに遮られかき消されたのに対して、「防ぐことはできない」と何度も繰り返される点にある。しかし、それでも、この声は自信に満ちたものとはいえない。14行目と15行目では、防ぐことはできないと「思えば」と仮定的になり、16行目と17行目では励み（諦め）になる「のか」と語られている。そして、長い沈黙をはさんで、18行目では「そ

ういう話で」と物語の結尾³⁾が提示され、長い沈黙によって物語の終了は決定的となる。

このように、Uさんの自己物語には、一貫する自己物語のプロットに対して揺さぶりをかけ、オルタナティブな物語のプロットを示す声が見られる。ためらいの声（伊藤 2005）が、評価の中にほんの一瞬だけ姿を現す否定的な言葉であったのに対して、揺さぶる声は、異なったプロットをより明示的に表す。

Uさんから2002年に届いた手紙によれば、彼は、その後2001年夏までは毎月セルフヘルプ・グループの集会に参加していたが、その後足は遠のいたという。「あんまり（*セルフヘルプ・グループに）何回もいくと、暗くなってしまうようで」と綴られている。

3-2. 錯綜する声：Zさんの事例

Zさんは、2002年当時20歳の女性で、大学生だった。彼女は、吃音のセルフヘルプ・グループに1度だけ参加したが、その後グループを離れる。私も参加していたその集会で、彼女は、自己紹介の時間に、吃音に悩むようになったのは中学校の頃からで、劣等感を持って悩んでいたと語った。集会の最後は、いつも、参加した感想を述べあう時間だったが、たまたまその日は時間が足りなくなった。司会は、初めて参加された方からだけ一言いただきましようと言って、彼女を指名した。彼女は、他の参加者が前向きなことに驚いた、また参加できそうだ、と語った。

私は、休憩時間中に、彼女と会話をして、自分の名詞を渡していた。翌日、彼女からの電子メール（メールZ1）が来た。ここでは、C. リースマンの詩モデルを用いて、電子メールの中で区別された部分を「連（stanza）」に見立てる仕方で分析する（Riessman 1993）⁴⁾。

メールZ1

<第1連 昨日の集会を振り返って>

…(略)…昨日は思い切って出席してよかったと思います。私は吃音を克服した××さん(*前日の集会に参加していたヴェテラン・メンバー)にレクチャーしてもらいたいなあ、克服のポイントを教えてくださいなと思っています。…(略)…

<第2連 吃音経験の発端>

私は吃音持ちを自覚したのは中学校位からです。小学校の時は自ら進んで「放送部」に入っていた位なので・・・

<第3連 面接>

言友会で就職、とくに面接に悩んでいらっしゃる人がいましたが、逆に私は面接を得意と

しています。吃らないようにしようとは努力しますが、ある教授は「吃ってもいいんだ。大切なのは気持ちや積極性だ」と言っていました。私はその通りだと思っています。

<第4連 気持ち>

中学から高校にあがるときも面接一発で合格しました。大学のゼミ（学部で最も厳しいといわれている）では、吃りましたが、合格しました。事業所で勤労体験をするインターンシップの選考面接でも、吃っても、私はやりたいんだ!!!という気持ちをアピールしたら合格しました。

<第5連 絶望>

このように、私は吃音をマイナスとっていながらも、それに怯まず人生を送ってきました。でも、完璧ではない自分、吃りそうになると焦る自分、時にはバイトのとき何もいなくなる状態がある自分がいやで、ときどき絶望的な気持ちになることもあるのです。

第1連は、前日の集会を振り返る内容だが、それ以降の語りは自己物語の色彩を強めている。第2連では、放送部に「自ら進んで」入るほど話すことに積極的で何ら問題を感じていなかった主人公が、中学生ぐらいから吃音に悩むようになる、という内容である。しかし、ここではそれ以上のことは語られず、続く第3連では、面接が「得意」だという話題へ移っている。

第3連を構成する三つの文の主語と時制をみると、私（現在形）、教授（過去形）、私（現在形）となっている。つまり、ここでは現在の「私」が語り手の視点から性格づけられており、二番目の文で登場する「教授」は、この語り手の声を権威づける機能を果たしている。

第2連で、主人公は中学生ぐらいになって吃音を自覚し始める。しかし、その後どのような苦しい出来事があったのかということが分厚く語られる前に、第3連で、いささか性急に語り手の声が現れ、主人公が面接を「得意」とするという性格づけが行われる。この性急さは、面接が「得意」だという自己イメージが、物語を順次語る周到さを忘れさせるほど語り手にとって切実で強いものであることを示しているのかもしれない。

面接を「得意」とする、というのは具体的にはどのようなことを指しているだろうか。第3連で「教授」は、「吃ってもいいんだ。大切なのは気持ちや積極性だ」と言う。そして、次の第4連では、大学のゼミの選考に「吃りましたが」合格し、インターンシップの選考でも「吃っても」合格する⁵⁾。これらの出来事の中では、実際に主人公の吃音が露になっており、その点ではコミュニケーションはスムーズではない。しかし、それを「気持ち」でカバーして結果を勝ち取る——これが「得意」の意味するところだと考えられる。

しかし、面接が「得意」という主人公の性格づけは、次の第5連では一貫していない。まず、

「私は吃音をマイナスとっていながらも」という部分は、第3連・第4連での評価にとっては、ある意味では余計ともとれる。なぜなら、第3連・第4連で描かれた主人公の性格づけと一貫させようとするなら、「このように、私は吃音に怯まず人生を送ってきました」で十分だと考えられるからである。さらに、現在時制が用いられている二番目の文では、主人公は、それまでと反対の性格づけをされている。

次に挙げるのは、翌月の集会が近づいたところに交わされた電子メール（メールZ2）からの抜粋である。

メールZ2

<第1連 減る吃音>

先日集会に出席してから、吃音が減った様な気がします。私の悩みを分かってくれる人と知り合えた安心感でしょうか、私自身にもわかりませんが、吃音を乗り越えた人の話し方をよく観察して実践してみたり、発声練習なども取り組んでいます。

<第2連 集会への不満>

…(略)…私も前回の言友会で楽しかった、との趣旨の発言をしました。今もその気持ちは変わりません。でも、実を言うと、私自身の希望としては、××さんや××さんのように克服した人から直接アドバイスや指導をしていただきたいと思っています。私より重い吃音の人の練習を見ると、(失礼かもしれませんが)逆に自分が苦しくなってくるのです。自分の為には直接教えていただくのが効果的なのではないかと考えています。

<第3連 面接>

今日は塾講師の面接を受けてきました。…(略)…私は吃音で苦しいのをよくわかっているのになんでこんなに頑張ってるんだろ(?)とたまに思ったりします。きっと今のままじゃいけない、動き出さないと始まらない、たとえ失敗しても、やろうとしたこと、頑張っ取り組んだことに意義があるんだ、と言いきかせて、挫折を繰り返してここまでやってきたんだらうなと思います。

<第4連 迷い>

振りかえってみると同じ失敗を何度も繰り返しているような気がします。もうすぐ20歳になるのですが、こんな二十歳でいいのかな?精神年齢は明らかについてきていないような気がする今日この頃です。

第1連では、集会に参加することによって安心感を得て「吃音が減った」と語られている。しかし、この物語がそれ以上展開されるということはなく、第2連では、集会それ自体に加わるよりも、吃音を「克服した人」から「直接教えていただく」方がよいという話になる。何を「直接教え」てもらおうのだろうか。第2連の「克服した人」を第1連の「吃音を乗り越えた人」と同じと読めば、「話し方」や「発声練習など」を「直接教え」てもらおう、と解釈できる。

これら二つの連では、Z1にはなかった声が、異なった自己物語のプロットを暗示している。それは、主人公の「吃音が減って」きており、これからも「話し方」や「発声練習など」によってさらに減ってゆくだろう、というプロットである⁶⁾。

しかし、次の第3連・第4連をみると、語り手は自信喪失気味である。「なんでこんなに頑張ってるんだろ(?)」あるいは「こんな二十歳でいいのかな?」と彼女は迷いを隠さない。

これまでの分析をまとめると、二つのメールにおいて、次の三つの声が、それぞれ異なった自己物語のプロット、あるいは登場人物の性格づけを示しながら錯綜しているのが分かる。一つ目の声は、面接の「得意」な主人公が、吃音が出ても「気持ち」でカバーして成功を収めるというプロットを示す。二つ目の声は、どもりそうになって焦ったり、時には何もいえなくなったりして「挫折」する主人公の物語を示す。そして、三つ目の声は、「話し方」や「発声練習」を覚えてもらいながら吃音が減っていく物語を示す。Uさんの自己物語の中で優勢な物語のプロットを揺さぶった声が、すぐに遮られ姿を消してしまったのに対して、Zさんの自己物語の中に現れた声たちは、少なくともメールZ1とZ2から読み取れる範囲では、どれが優勢ともいえず、複雑に絡み合ったままである。

しかし、こうした状態がいつまでも続くというわけでもなかったようだ。Zさんは、やがてセルフヘルプ・グループに参加しない意思を固めてゆく。そのことを伝える電子メールの中で、彼女はこう語っている。「出席したところから私の程度は、格段によくなりました。インターンシップなど、人と触れ合う機会が多く、『必然的にしゃべらなければならない』場にさらされて、もまれて、困難をひとつずつ乗り越えていくことで、自分の中に自信と度胸が付き、結果的に改善に向かったのではないかと考えています…。吃音が改善された主人公を前景化することによって、セルフヘルプ・グループに参加する必要があるという決断が説得力を帯びる。この前景化を推し進めるのは、先ほど挙げたうち、吃音が減っていく物語を示す三つ目の声である。「話し方」や「発声練習」について具体的に語られてはいないが、『必然的にしゃべらなければならない』場にさらされる経験がその代わりの機能を果たす。この三つ目の声が優勢になってゆく彼女の自己物語は、セルフヘルプ・グループを離れて生きる彼女の行為選択とコインの裏表の関係にある。もちろん、この声がいつまでも優勢であり続けられるかどうかは、彼女が生きる環境の変化と遭遇する経験の偶発性によって大きく左右されるだろう。

4. 綻びから漏れる声：Hさんの例

吃音のセルフヘルプ・グループのメンバーであるHさん（2006年10月現在35歳の男性）は、集会に参加することは少ないが、いつも会報に寄稿している。文章を書く習慣については、次のように述べられている。彼は、病院の相談員（ソーシャルワーカー）を経て、故郷の知的障害児者施設で生活支援員をするようになった。病院に勤めていた頃、彼は箱庭療法に興味を持つ。臨床心理学を勉強したことはなかったが、空き時間に、面接室などで見よう見まねの箱庭作りを行なうようになった。すると、その間は「無心に取り組めて、充実した時間」になった。やがて、箱庭を作る代わりに、仕事の中で日々感じていたこと、イメージが浮かんできたことを文章にしてみるようになったという。

彼の文章は、主に、映画や文芸の評論（コラム）である。（この他に、2005年に入ってから始められたコント（フィクションの小話）もある）。

Hさんの文体には、主人公の体験を分厚く語るというよりは、むしろそれを抑えた——その意味では非自己物語的な——色彩が見受けられる。Hさんは、既成の映画・文学を引きながら、（多くの場合、吃音者である）登場人物の性格や行為に対する解釈の中に、自己を織り込んでいく。時には、バックナンバーの再録という形で過去のもので語りなおされ、新しいコメントが書き加えられる、ということもあった。ここで取り上げたいのは、そのひとつである。

そこでは、まず、主に近況を語る前文が付される。内容は次のようなものである。最近話するときの調子がよくない。対人関係上で言えなかった迷いや行き違いがあり、夜もよく眠れない日が続いている。そういう状態のときは言葉がつかえやすく、みっともなく恥ずかしい思いをする。「以前にも同じような状態になったことがあった。ちょうど雪山で氷の裂け目のクレバスにはまってしまうような感じだ。春の暖かさとは裏はらに、心が冷え切って凍えているような…。コラムは暖かく、穏やかなものにしたいと思っているのだけれど、そんな寒々とした心境の時は、あたたかなものは、あまり湧いてこない」。しかし彼は、以前から考えていたバックナンバーの手直しをしようと思い立つ。それらのナンバーは「吃音者が登場人物で出てくる新旧の小説を題材に自分の心境や姿と重ね合わせて書いたものだ。いつも思うことだけれど、私は当時とほとんど考え方が変わっていない…。勢いのない暗い話ばかりだなと感じる」。

このようにして前文が終わると、空白行をおいて、バックナンバーが始まる。導入部分では、前向きに話すことの困難さが語られる。確かに前向きに話すことは大切だとは思いますが、どもる話し方はそれでもみっともなく変なことである。「そうした中で、それと判るほど吃っても前向きに話すということは、とても辛く苦しく、勇気のいることです。きっと、吃るということは、『前向きに』というのとは逆に、どんなに頑張っても報われない、上手く伝わらない、人を行き詰らせ、前に進めなくするものかもしれません。…(略)…だから、前向きに生きて話そうという言葉掛けは、大切なことだと理解できる反面、そんなに簡単なことじゃないかも、と

思えるのです」。

この後、いくつかの文芸作品における登場人物たちが挙げられる。水上勉『五番町夕霧楼』の榎田正順(くぬぎだ せいじゅん)、宮部みゆき『人質カノン』から「八月の雪」の石野充(いしの みつる)および「生者の特権」の田坂明子である(宮部1996;水上1966)。『五番町夕霧楼』は金閣寺放火事件をモチーフにしたもので、榎田正順は金閣寺に火を放つ吃音者の僧である。この小説では、正順の心理的な内面については、正順の視点からよりも、むしろ夕子という女性の視点から描かれている。このことを指摘してHさんは「本人からの感情や内面の表現がないのは、吃音者が喋れないゆえに、外からみて、どうもよく分からない不可解な存在であることの表れかもしれません」とコメントしている。

一方、「八月の雪」の石野充は吃音者ではなく、「飯田くん」という吃音者の友人である。飯田くんは、クラスでいじめにあい、遺書をのこして自死を遂げる。充はいじめグループに立ち向かうが、自らもいじめの対象となり、その際に交通事故に巻き込まれて片足を失う。すっかり自暴自棄になっていた充だが、亡くなった祖父の戦中・戦後の人生を知る機会があり、「運命に翻弄されて失意に苦しんでも、地道に一生懸命生きていくことの意味を考え直して」、また人生を歩き出そうとする。このように紹介した後でHさんは「現実には前向きになるのはとても難しいことですが、すぐあきらめたり、自分を捨てたりするほどのことではないかもしれませんね」と語っている。

続いて「生者の特権」の田坂明子が紹介される。明子は恋人に裏切られた痛手から、深夜に飛び降り自死をはかる。失恋しても強く前向きになるべきだというのは正論だと分かっているが、明子には理屈を寄せつけない「心のクレバス」がある。しかし、明子は、偶然、いじめられて隠された宿題を探そうとしていた少年に出会い、一緒に深夜の小学校に忍び込んで、中を冒険することになる。この冒険が終わった時には、明子は、またもう一度やり直していこうという新しいエネルギーを得ている。このように紹介したうえで、Hさんは、ささやかな出会いから心境が変わるほどの力が得られるところがセルフヘルプ・グループと似ている、とコメントを加えている。

ここで「コラムバックナンバー終わり」と区切りが入る。そして、空白行をはさんで、次のように述べられる。

無理してでも話すと、とても、みっともなく辛くなったり、落ち込んだりすることがある。そんな時は簡単には気分は変わらない。時間を少しおいて、自分自身の気持ちを立て直していく。「八月の雪」の充や「生者の特権」の明子のように、ゆっくりとでもまた歩み始める。簡単にはいかないけれど…。でも、どんな時でも、自分なりにやれるうちは、前に進んで生きていくことは投げ出すわけにもいかない。前向きにはなれなくても、今、

自分にできることを辛抱強く続けていくしかない。今回、バックナンバーのコラムを読んでいて、少しは気分が楽になった気がした。内容が暗かったり、後ろ向きだったりするけれど、結局は自分の気持ちを立て直すために書いたものなのだと、改めて感じた。

このコラムをHさんによる「前進的な物語」(Gergen & Gergen 1983)として読むのは、さほど困難ではないだろう。バックナンバーの最初に位置する『五番町夕霧楼』の正順について、語り手は「外からみて、どうもよく分からない不可解な存在」と性格づける。一方、その後に出てくる「八月の雪」の充と「生者の特権」の明子は、絶望的な状況から前向きに生きてゆこうとする人物として描かれる。そして、前向きになるのは「とても難しいこと」ではあるが、それでも、これらの登場人物のように、「すぐあきらめたり、自分を捨てたりするほどのことではないかもしれ」ないとコメントされている。つまり、登場人物の性格づけがネガティブなものからポジティブなものへ、と配置されている。それに伴って、Hさん自身が感じていた前向きに話す困難さも、「今、自分にできることを辛抱強く続けていくしかない」、「少しは気分が楽になった気がした」と前進的なものになっている、と解釈することができる。

しかし、このような読み方をしたときに、完全にはつじつまが合わないように見える部分——浅野のいう「物語の穴」(浅野 2001)——がある。それは、バックナンバーの前文にある語り手の声である。この声は、バックナンバーの外側にあって、バックナンバーを読み返した後の時間に属している。つまり、「バックナンバー終わり」と書かれた後の最後の語りと同じ時間に属している。その声は、「私は当時とほとんど考え方が変わっていない…。勢いのない暗い話ばかりだと感じる」(傍点引用者)と現在時制で語る。もし、この前文の声がこのコラムを編む前であるなら、「このコラムを編む前は、自分の話は暗い話ばかりで私は当事とほとんど考え方が変わっていないように思えたが、バックナンバーを仔細に読み返し、このコラムの構成を考え、実際にバックナンバーを配置するうちに、今、自分にできることを辛抱強く続けていくしかないと思うようになった」と語られるはずである。しかし、この前文の声は、後文の声と同じ現在時制で書かれており、「バックナンバーを仔細に読み返し、このコラムの構成を考え、実際にバックナンバーを配置する」作業をやり終えた後の、後文の声と同じ時点から「私」を見ている。この点からみれば、現在の「私」は「今、自分にできることを辛抱強く続けていくしかないと思うようになった私」であると同時に「当時とほとんど考え方が変わっていない私」でもある、ということになる。

Hさんの事例は、これまでの二つとは異なって、書かれた物語であるから、自分が編集しようとしているテキストを点検し操作する裁量がインタビューの場合⁷⁾よりも相対的に大きい。当然、語り手の側には、ある程度一貫した趣旨のもとに纏めたいという意思が働くと考えられる。そのような意思のもとで書かれた文章の中では、自己物語もまた一貫性の強いものになり

やすいだろう。しかし、そのような自己物語の中にさえ、一貫した物語として読むのを邪魔する声が入り込む可能性がある。このコラムの前文にあった声は、こうした綻びを示すものである。この声に注意を払うならば、Hさんの編集から見えてくる自己は、単に前進的なものではなく、「前向きに生きる」ことの困難さや「不可解な存在」としての吃音者に対しても読者の目を開かせうる。Hさんの自己物語の綻びから漏れる声は、このような吃音者の自己が持つ微妙さを示すと考えられる。

5. 自己物語の多声性を記述するということ

本論文が三つの事例を検討することで支持する基本的な主張は、自己物語はそもそも多声的だ、ということである。自己物語は、ひとりの個人が持つ統一的なものとしてイメージされやすいが、注意深く観察すれば、しばしば複数の声が並存し葛藤しているのが分かる。

これらの事例がさらに語りかけることを、三つ挙げたい。第一に、自己物語の多声性は、移ろいやすく目立たない性質を持つことがある。伊藤（2005）におけるAさんの事例と同じように、Uさんの語りにおける多声性は一貫した物語のプロットのもとですぐに遮られ、姿を消してしまう。同様に、Zさんの自己物語が持つ多声性は、プロットの選択（もしくは収束）に伴って、目立たないものになってゆく。Hさんの場合も、前文に含まれる一文の時制にこだわらない限り、前進的な物語としてしか見えないという点で、その多声性は非常に目立たないものだと見える。

その一方で、これらの事例は、多声性が、単に束の間の出来事として終わるだけではなく、オルタナティブなプロットを明示・暗示することがある、ということを示している。Uさんの事例では、「自責の物語」に対して「防げない死」の物語が、Zさんの場合には、吃音が減ってゆく物語に対して、吃音が出て「気持ち」でカバーして成功を収める物語と「挫折」する主人公の物語が、そして、Hさんの事例では、前進的な物語に対して、いつまでも前向きになれない物語が浮かび上がる。これらは、自己物語の多声性が、自己物語のプロット間の拮抗に直接的な関連があることを示している。

本論文の事例分析が示す第三の点は、自己物語の多声性は、自己物語を編集し、変化させたり一貫させようとしたりするプロセス全体に着眼して読む中で現れやすい、ということである。伊藤（2005）におけるためらいの声は、どれかひとつのAさんの自己物語を眺めただけでは、なかなか気づきにくいと考えられる。というのも、どのような人でも、口述する際に、言いよどんだり、短い間があいたり、あるいは冗長な言葉を挿入したりすることは、よくあることだからである。しかし、Aさんが時間を経て産み落とす自己物語たちを並べてみることで、「回復の物語（the restitution narrative）」との決別という物語のプロットが、解釈する私の側に浮かび上がってくる。この段階になって初めて、言いよどみや間、あるいは冗長に見えた言葉

が、そのプロットに抗するものとして新しい意味を帯びてくる。Uさんのプロットを揺さぶる声は、知人の死を物語ることによって姿を現している。正直に言えば、当初私はそれらの話を、少しゴシップめいた挿話で、自分の報告書には使えない部分だろう、と受け取っていた。しかし、彼の自己物語編集が一貫した自責の物語へと向かうものとして見えてくると、それらの話は単なる瑣末な挿話以上の意味をもってくる。Zさんの自己物語の多声性は、メールZ1とZ2のどちらかだけを読んだのでは、その複雑さと動態をとらえることはできないだろう。Hさんのコラムで前文に含まれていた声は、時間を隔てたバックナンバーの編集によって語り手の視点が重層化していることをふまえないと、物語全体を支配する前進的な変化にかき消されてしまったかもしれない。このように、自己物語の多声性は、物語の継時的な変化や編集に注意を払った読み方の中で、はじめて気づかれやすくなる性質を持つと考えられる。

自己物語の多声性が、テキストの中に存在して無条件にその存在を気づかせるわけではないという本論文の考察は、次のような問題を導く。自己物語の多声性に気づいて記述する、という営みは何を意味するのであろうか。見ようによってはひどく瑣末な言葉たちに耳を向けてしまうこと、あるいは、「どんな人の場合でも自分の言うことに整理のつかない部分ぐらいは持っている」という見方からすれば、ごく当たり前にも見える葛藤的な側面にスポットを当ててしまう私の営為は、どのようなものとして理解可能なのだろうか。これは、絶えず自問し続けなければならないことだろうが、本論文では、次の回答を用意したい。「回復の物語 (the restitution narrative)」によらずして生きるための場としてセルフヘルプ・グループを構想したとき、研究者や援助者は、どうしても完成度の高い自己物語に対する賞賛を送りやすいと考えられる。というのも、セルフヘルプ・グループで語られるのが「回復の物語 (the restitution narrative)」でないとしたら、では何の物語なのかという疑問に答えないと、何か腑に落ちないように感じられるからである。そのようなときに、「回復の物語 (the restitution narrative)」とは別の物語を見事に語りきる人を見ると、自らの解釈者としての精神的安定を求めて、その人と物語に飛びついてしまいやすい。しかし、このことは、「回復の物語 (the restitution narrative)」とは見事な決別を見せた自己物語の背後に、そこに未だ至らない自己物語たちがある、という現実に対して、われわれの注意を麻痺させることにつながりやすいかもしれない。つまり、生き難さの隠蔽に結果的に加担してしまう危険がある。本論文で取り上げたUさん、Zさん、そしてHさんはいずれもセルフヘルプ・グループの中心的なメンバーではなく、むしろ、そこから距離を置いたり離れていたりしている人である。しかし、そのような人たちにとって、セルフヘルプ・グループが自己物語を書き換え編んでゆく場として再び必要とされる日が決してこないとは、誰にもいえないことである。そのような時にもセルフヘルプ・グループがなお開かれた場であろうとするならば、「回復の物語 (the restitution narrative)」と見事に決別する事例を語るだけではなく、それと緊張関係にある声たちに耳を傾け、「回復の物語 (the

restitution narrative)」との決別を未だなしえない場としてセルフヘルプ・グループを物語っていくことも、また必要なのではないだろうか。

注

- 1) 「回復の物語 (the restitution narrative)」の特徴は次の点にある。第一に、中間部をなす「病気」の状態は、あくまでも一時的な中断ないし脱線として描かれる。第二に、物語の結末が元の状態に戻ることで描かれる。それによって、病いは、ちょうど機械の故障がなおるように、医薬品や医療技術などによって修復されるものとして描かれることになる。そして、第三に、主人公がどう病いに対処したのかよりも、むしろ、専門技術を持ち治療を可能にする他者の能力と活躍の方が、雄弁に語られやすい。
- 2) 「評価」とはラボフとワレツキー (Labov & Waletzky 1967) による分析概念で、語り手が、物語の特定の部分を指示して、何らかの評価的な言明を行っている部分を指す。これによって、物語は単なる出来事の羅列に終わることを免れ、聞き手はどのように物語を受け取るべきなのかガイドされる。また、「評価」は、語り手が登場人物の視点を離れてナレーションを付す形をしばしばとるため、自己物語が持つ「視点の二重性」(浅野 2001: 7-8) が顕わになる重要な部分だといえる。以下では、「評価」という言葉にいちいち鍵括弧を付さないが、常にここで述べた意味で用いる。
- 3) ここでの「結尾」は、ラボフらによる用語で、物語の最後で、それ以前の部分と時間的に断絶する部分を指す (Labov & Waletzky 1967)。いわゆる「その後」談や評価の繰り返し、あるいは「これでおしまい」という宣言といったヴァリエーションがある。アダンによれば、結尾は発言順終了機能を持つ (Adam [1984]1999=2004: 152-3)。
- 4) 詩モデルは、物語の部分もそうでない部分も含めて、あるいは、入念で詳細な物語もそうでない物語も含めて、語りを全体的に解釈していく場合に助けとなる。「詩」という言葉は、例えばラボフとワレツキーのモデルによっては、周到さを欠いていると見られやすい部分に対する読み手の敬意を呼び起こす (伊藤 近刊)。そして、そうしたアプローチも立派な分析方法なのだと言明することには、何か複雑で小難しいことをやらないと「分析」や「方法」にならないのではないかという先入観からわれわれが距離をとりやすくなる意味がある。
- 5) 細かく考えると、この部分には他の解釈の可能性もある。それは「吃っても、私はやりたいんだ!!!」という部分を直接話法として読む仕方である。この場合、主人公の吃音が面接で実際に表れるのではなく、「たとえどもって」と仮定的な話になる。しかし、書き言葉であるにかかわらず彼女が直接話法を用いなかったことと、読点の位置とを併せて考え、主人公は実際にどもってしまったが、気持ちをアピールして合格した、という解釈をここでは採る。
- 6) これは、伊藤 (2005) で示した物語類型の中では、「改善の物語」にあたる。ただし、「改善の物語」が、結末における主人公の吃音について、「周りは気づかない」とか「(吃音の重さが) そうでもなくなる」といった言葉を慎重に選ぶことによって、吃音が無くなるという「回復 (restitution)」とのずれを明示するのに対して、ここで読み取ったZさんの物語では、結末における主人公の状態は語られず曖昧なままである。その意味では、Zさんの物語は、「回復の物語 (the restitution narrative)」との親和性を拒絶していないといえる。
- 7) もちろん、インタビューの場合でも、自らの記憶のみに頼って語りなおす場合とトランスクリプトを読みながら語りなおす場合とでは、この種の裁量の程度は異なる。

文献

- Adam, J., 1999, *Le Récit*, Paris: Presses Universitaire de France. (=2004, 末松壽・佐藤正年訳『物語論—プロックからエーコまで』白水社)
- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.
- Frank, A.W., 1995, *The Wounded Storyteller*, Chicago: The University of Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- Gergen, K. J. & M. M. Gergen, 1983, "Narratives of the Self", T. R. Sarbin & K. E. Scheibe eds., *Studies in Social Identity*, New York: Praeger, 254-73.
- Holstein, J. A. & J. F. Gubrium, 2000, *The Self We Live By : Narrative Identity in a Postmodern World*, New York : Oxford University Press.
- 伊藤智樹, 2005, 「ためらいの声——セルフヘルプ・グループ「言友会」へのナラティブ・アプローチ」『ソシオロジ』154, 3-18.
- , 近刊, 『セルフヘルプ・グループの自己物語論——アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社.
- Labov, W. & J. Waletzky, 1967, "Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", J. Helm ed., *Essays on the Verbal and Visual Arts*, Seattle: American Ethnological Society(Distributed by the University of Washington Press), 12-44. (reprinted in *Journal of Narrative and Life History*, 7(1997) :3-38.)
- Lincoln, Y. S. & E. G. Guba, 2000, "Paradigmatic Controversies, Contradictions, and Emerging Confluences", N. K. Denzin & Y. S. Lincoln eds., *Handbook of Qualitative Research*, 2nd ed., Thousand Oaks: Sage, 163-88. (=2006, 池田寛訳「パラダイムに関する論争, 矛盾, そして合流の兆候」平山満義監訳『質的研究ハンドブック1巻——質的研究のパラダイムと眺望』, 145-66.)
- 宮部みゆき, 1996, 『人質カノン』文藝春秋.
- 水上 勉, [1963]1966, 『五番町夕霧楼』新潮社.
- Riessman, C. K., 1993, *Narrative Analysis*, Newbury Park: Sage.